

# 病理検査室の窓辺から

## 1つの病巣内に複数の病変が併存

齊藤 隆三

PCL 東京 病理・細胞診センター

脂腺母斑の病理組織標本をみていると、いくつかのほかの病変が存在していることがある。二次性腫瘍といわれているもので、脂腺母斑の経過中に生じ、臨床症状の変化に気づかされる。基底細胞癌、脂腺腫瘍などがよくみられる。脂腺母斑自体にこれらの二次性腫瘍を生ずる要因が存在しているためと考えられる。また、良性の腫瘍性病変であっても、一部が悪性化し、癌病変を伴ってくることもある。このように1つの病巣内に複数の病変が併存しているケースがときにみられる。

複数の病変が併存する例としてよく知られているものに、母斑細胞母斑の病変内に毛包が開大して表皮囊腫状構造が存在している場合がある。これは Duperrat 母斑といわれ、骨組織が存在している母斑細胞母斑は Nanta の骨性母斑、母斑細胞母斑にアレルギー性接触皮膚炎などが重なり臨床や組織学的に変化を生じたものは Meyerson 母斑と呼ばれている。これらのように病変内に複数の疾患が混在していることに対して1つの疾患名が付けられている場合があるが、それ以外にも複数の疾患が併存する例はときにみられる。顔面の母斑細胞母斑に汗管腫が存在していた例、脂漏性角化症の一部にウイルス性疣贅の病変が存在した例、脂漏性角化症の病変の一部に Bowen 病、基底細胞癌や有棘細胞癌が生じた例など、病理組織像から意外な疾患の混在を指摘されることがある。多くは同一部位に生じた偶発なものであろう。このような場合、臨床像が定型的な症状と異なり、臨床診断に苦慮することがある。

皮膚疾患の臨床診断は視診、触診などにより下される。とくに視診では疾患に特徴的な症状を呈していれば診断は比較的容易であるが、特徴的な症状を呈していない場合には臨床検査を行い、診断にたどり着く。そこに病理組織学的検査が必要になる場合がある。

臨床診断に苦慮するときには病理組織検査の依頼書にどのような理由で臨床診断がつけられないのか、臨床症状の問題点を詳記しておくことが、病理医にとっても病理診断に重要な情報を与えてくれる。